

ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさとルネサンス

第9号（二〇〇七年二月）

常世の国二百の恋を

近藤治平

石岡に越してきて、この二月十日で満十年となる。もともと私は、一日でも暮らせばそこは「ふるさと」という考えを持つているのであるが、十年も暮らしてしまうと、もうどっぷりとふるさとと言わねばならないだろう。

三年ぐらい腰掛のふるさとと想っていたのであったが、腰掛というわけにはいなくなってしまう。こうなるともう確りと、このふるさとに恋をしなければならぬ。

私にとって、暮らしを紡ぐというのは、そこに恋を紡ぐということだから、人にも風景にも熱烈な恋心を持って、ふるさととしての暮らしを紡いでいかなければならない。この地に一昔を越えるに当たって、改めて熱烈なる恋をしろと自分自身に言い聞かせてみる。

随分昔のことになる。

狂ったような熱烈な恋に夢中したことがあった。

「何で。あなたには奥さんも子供もいるのよ。あなたの奥さんとは、あなたと奥さんが知り合いい、恋に落ちるずっと前から私は友達なのよ。しかも、奥さんがあなたの激しすぎる愛情に戸

惑い、しり込みする背中を押してあげたのは私なのよ。何で私が今、彼女と同じ思いをしなければならぬの。あなたは熱すぎるのよ。遊びの恋をしない人なんだから。何で私もきりきり舞いの命がけにならなければならぬの」

妻と妻の友人の女性との間を三年間、死に物狂いに往還した。辛さを紛らわすつもりはなかったが、恋の辛さの分だけ仕事もしてきた。作家生活の中で一番いい仕事をしたのもこの時期だったように思う。

三年が過ぎたとき、その女性は私から去っていった。

「もう燃焼するものがなくなってしまったわ。消し炭も残ってない」

そう言って女性は生家のある神戸に帰っていった。

その二年後であった。

「生涯をかけてやりたい仕事が見つかったの。御免ね」

妻は自分の新しい人生を見つけ私を卒業して行った。二人に分散していた男の熱情を一人で受けることに逃げ出したというわけではなかった。

「俺も少し立ち止まり充電をしろということか」

思わず強がって自分に呟いて聞かせたが、失恋の二文字を飲み込んだに過ぎなかった。

妻は去るとき、

「あなたは、破壊も創造もしてくれなかった」と、懐かしむように話した。彼女にとって私は、その時すでに過去を思い出したときに現われてくる残像の人になっていた

神戸に帰る前夜、六本木のホテルに過ごしたとき、

「あなたは遊びの恋をしない人なんだから」と妻の友人であった女性は翻弄された三年間の自分自身を苦笑するように言った。

この言葉をどう受け取り、消化すべきか結論の出せぬまま数年が過ぎた。その間、線香花火までもいかな小きな、それこそ行きずりの恋は幾つかあった。しかし、そこには一時の慰謝はあったが、自分の人生を突き動かすような感動はなかった。一度、恋の修羅を歩いてしまうと、好きになるだけの恋は、恋とは認識できなかった。

振り返ってみると、自分自身の人生に確りと対峙し、生きるということに燃えているときは、いつも恋の修羅の中に居るときだったと思う。さらにもっと自身の裡を掘り下げてみると、生涯にわたって一人の愛する女性と恋の修羅を歩き続け、手を取り合って野たれて死暮れたい、という強い願望が軸としてあるように思う。

一休宗純を読んだとき、晩年の十年間（七十七歳〜八十七歳）「森（三十一歳〜四十一歳）」という盲目の女との性愛の生き様に衝撃を受け、

また小林一茶の晩年、中風で倒れ半身が不自由となり寝小便を漏らすようになってもまだ添い寝のしてくれる妻を求め、三十二歳の「やを」を娶り、じいちゃん体に障るよ、と言われながら、夜毎「やを」の肌を求めながら六十五歳の生涯を閉じた生き様に共鳴するものを覚えたのは、自分自身の中に「恋に野たれて死暮れ」という思いがあったからと言える。

多くの者は、そうした激しい生き方に憧れを感じることはあるが、それを現実に捉え、そうした生き方を考えることはしない。

一休宗純が「生なく滅びなし」「出得するも出得せざるも、かれもわれも自由なり、神頭は鬼面と共にらび、敗闕も当に風流なり」として修羅の実相を歩いたのかどうかは知らないが、禅門の僧でありながら、「夢に上苑美人の森に迷うて 枕上の梅花花信の心 満口の清香清淺の水 黄昏の月色新吟を奈せん」と森（しん）女の性器に接吻したときのことを詩にうたったような、真実から目を離さず真実に没頭して生きる姿には、自分を映し見るものがあつた。一休宗純これを歌ったときの年齢はすでに七十歳を大きく越していた。

また小林一茶が、中風の震える手で三十二歳の「やを」の下半身をまさぐり乳をまさぐりながら、「わしは、森羅万象みな句にしてやった。月だの、花だのと言わん。馬から蚤虱。そこら走り回っている餓鬼めらまで、みんな句に詠んでやった。その眼で見れば蚤も風流。蚊も風流よ」（藤沢周平「一茶」より）と話して聞かせ

る様子を思うと、自分もそうありたいと切望したものであつた。

まだ尻の青い高校生だった頃、ランボーやジュネに傾倒したことがあつたが、作家として歩き出したとき、一休宗純や小林一茶の生き様の方がはるかに作家らしいと自分自身への理解が届いた。

ランボーにもジュネにも共感するものはあつたが、それは単に精神の倒錯に過ぎないと言える。しかし、一休にしる一茶にしる普通にみれば異端者であり精神という側面で見れば、ある種の倒錯者といわれるのかも知れない。

一人の女性に対して熱烈に恋をして、それを生涯にわたって持続し続けるというのは、深くその意味を考えなければ、尋常で、あるべき理想の姿といえる。恋の一時に浮かれているものや、恋を知らない、恋に憧れているものにとつてはロマンチックで甘く酔える言葉ではあるが、実際に一人の女性に対してまた男に対して、恋の熱情を間断なく注ぎ、受け入れ続けるといふのは、相当な覚悟と修羅を生きる力を持つていなければできないものではない。しかし、それは究極の恋の姿であることには違いないし、それは覚悟のない者にとつてはとてん可成堪えられないのではない。愛と恋の違いは、修羅に生きる覚悟の違いにあるのだろうと思う。

その覚悟の中身とは、死んだ恋人の肉を自分の腹を満たすために喰い尽すこと、或いは自分を裏切った恋人を殺しその肉のすべてを喰い尽すこと、に等しいといえる。仮に私がそれを実

行したら、他人は私を精神異常者だというだろうし、実際には精神異常者ではある。しかし、恋の修羅を行くとはそういうことなのだと思う。

「あなたは遊びの恋ができない人」と言つて神戸の生家に帰つていった女性にも「あなたは、破壊も創造もしてくれなかった」と去つて行った妻にも、私はそれに等しいことを実行し、強要したのであつたと思う。二人が去つていった後に覚えた喪失感修羅を生きることは違つた混乱と嫌悪を覚えたのはある意味彼女達の死肉を喰つたに近い情態だったのであると思う。しかし、その混乱と嫌悪の渦中にあつても、もう二度と恋をしないと考へたことも思つたこともなかった。そればかりか心の片隅にはいつも修羅の恋を欲し、その機会をうかがっているものがあつた。一緒に修羅を歩いてもよいことこちらの心に響いてくる女性に出会うことがなかつただけだといえる。

九十年を迎えて、いよいよ腰掛ではなく、この石岡に暮らしを紡いでいく軸を持たないといかん、と思つてるところにとてん可成面白く稀有な表現をする女優さん、小林幸枝に出会つた。特に恋歌の表現には、独特の綺麗な流れを創り出す。

恋歌を綺麗な舞いの流れに表現するというのはかなり難しく、大方の場合、文章に負けて生々しさだけが前面にできてしまうものだが、それが無い。むしろこちらからもう少し生々しさを出すよう要求するところがある。

龍神山挽歌

打田昇三

そんな出会いがあったことから、終の地に暮らして紡ぐ軸として、常陸の国（常世の国）の風景をモチーフにした百の恋物語を書いてみようと思ったのである。そして、それを朗読舞に表現していくことを思いついたのであった。

常世の国と呼ばれるこの地の風景に確り対峙し、またその風景の中で朗読に舞う風の流れに確り対峙して、風前の灯を高く燃え上げてみるか、と覚悟を考えたのである。

折角絶筆を解いて、終の地に百の恋物語を書くのだったら、一休宗純や小林一茶にならう以上に、老いを捨ててひたすらに人の自然、男女の自然をふるさとという風景の中に書き込んでみたいと意気込みだけは激しく思っている。

しかし、百の物語を創作するとなると、気力とはともかく体力の続くことが思われるが、既に歩き始めた以上、歩みを止めるわけにはいかない。歩き始めた途端、はるかに遠い先達者ではあるが、一休宗純にも小林一茶にも畏怖する気持ちの肥大してくるのを覚える。

朗読にふるさとの風として舞を舞ってくれる女優小林幸枝さんには、もしも私が雑木林に行き暮れ、死暮れたら、せめて骨ぐらい発見してくれ、と早くも弱気に願っている。

旅の始まりは「恋瀬川物語」である。

風に吹かれて呟いた一行文で「恋瀬の川に笹舟のながす」と感傷したことがあるが、今は、恋瀬の川の流れに笹舟の転覆しないで、霞ヶ浦に漕ぎ出してもらいたい、と願うものである。

北島三郎のヒット曲「北の大地」を俺たちの歌だと胸を張っていた人がいた。農林関係の仕事で一応の役職に就いていたが、若かりし頃には故郷の北海道で現場の苦労を経験したらしく、当時を偲んでの感慨らしかった。

日本の国土は七十五%が山地だそうで、耕作地にするには木を切り根株を取り除き、草を刈り掘り返し、土を砕き地をならし、水はけを考へ畝を立てねばならないし、森林のままでも木材を取るためには枝打ちや間伐、下草刈りなどの重労働が伴う。今は機械化も進んでいるが、かつては全てが手作業だった。

それでも手を入れれば荒地が耕地になり、木材が切り出せるというのは恵まれているので、中近東からアフリカにかけての砂漠地帯・半砂漠地帯では森林も無いし雨が降らないから作物が作れない。さらにはヨーロッパでもバルカン半島とかイタリア半島とか火山性の土地で鍾乳洞の多い地域は土の中に大きな石ころが豊富に混じっていて耕作を阻害している。限定された区域ではあるがその石ころを一つ一つ拾い出して「立派な葡萄畑にした」と言う理由からユネスコが表彰した場所がある。恐らく一代や二代では出来なかつた作業だと思う。

その点で日本は自然にも地形にも恵まれているのだが、逆に関東平野に位置する石岡には八郷地区の山麓部を除き山らしい山がない。

山というのは郷土のシンボルみたいなもの

である。北アフリカの某国には筑波山そっくりの山があつて、遙々とその地を訪れた茨城県人は凄く感激する。単純に考えても筑波山麓東部の大地に悠久の歴史を刻んできた常陸国府跡の町にシンボルが無いのは銭湯に煙突が無いのと同じくらい淋しい。かつては石岡市史第一章の第一節・山野の冒頭に「市内唯一の山」として丁寧に記載されていた「龍神山」が在ったのだが、今では石岡名産・碎石の産地になってしまいい、とても「山」とは呼べないようだ。何時の時代か「先見の明」（本当は「浅賢の迷」？）があつた当時の為政者によって碎石場になつたらしいが、資源リサイクル化が推進される現代ではビル解体などで生じるコンクリート片を砕いた再生碎石の使用が国で推奨されており天然碎石の需要も伸びないと聞いた。

そうなると石岡市のために犠牲にされた龍神山の立場は一体、どういうことになるのであるうか。耕地の少ない地域と違い山野を切り拓いて耕す必要も無かつたし、交通の邪魔になつていた訳でも無いのだが無理に崩されてしまったのである。勿論、山が文句を言つたり、不貞腐れて暴れたりはいしなないであろうが、石岡に住む者としては何となく山の神様に借りが出来ているような気がしてならない。神様が当事者に責任を取れ！と怒つても、時効の壁があり、時代の流れもあるから、今では全市民が知らない振りをするしかないようだ。

しかし、平成十六年秋に石岡市制五十周年を記念する石岡市文化協会第三十七回文化祭があ

り、その一環として同人誌「ゆずり葉」を出しているグループ石岡雑文同好会が公募原稿で「石岡市民文芸」を出版したのだが、その中に染谷在住のKさんから寄せられた「御龍山（おたつやま）」と題する作品があった。故郷を離れて久しぶりに帰ったら、神の山である龍神山が見るも無残な姿に変わってしまったことを心から嘆き、龍神の怒りを身を感じた龍神山追悼の幻想的な物語である。さらに、この会報の第三号でも会員のSさんが「月曆（つきれき）観月龍神山」という作品で山の人為的崩落を嘆いている。：つまり市民の中にも「お山の不幸」を心から悲しんでいる人たちがいるのである。

さて、そうすると「ふるさとルネサンス」に関わる者としては「昔、石岡には龍神山がありました：」では済まされないように思う。ここで今は亡き龍神山に向かって追悼の言葉を述べることにするが、人間の思い込みは以外に深いものである。例えば二千六百年も前にピタゴラスが地球は球体であると言いついてから二千年も経ったヨーロッパでコペルニクスやガリレオがいくらか地動説などを主張しても「地球は丸い」とする意見は頑迷なキリスト教徒たちに受け入れられなかった事実がある。宇宙に人工衛星が飛び出して写真で証明したから今では「地球は平である」という者は居ないが、つい近年までイギリスには「地球は平面だと信じる会」なる団体があって活動していたらしい。一般に弔辞は故人の功績を強調するものだから、これから龍神山に関して有ること無いことを書き立てる

が「それは嘘だ！」などと言わないで貰いたいのである。

龍神山に関して石岡市民が有する情報は「古代には海に面し、縄文時代から山麓に人々が住み、雄龍、雌龍と呼ばれ全山緑なす二つの峰があつて、それぞれに佐志能神社が祀られ、湧き出る水は地域の生活用水として用いられたほか、早魃に際しては雨乞いの聖水として近隣農村の信仰行事に使われた。また山頂からの眺望と四季折々の樹木の変化が、手頃な遊歩道と相俟って市民の憩いの場として親しまれていた」というものである。

「山高きがゆえに貴からず」と言う。石岡は例外としても、至る所に山がある日本ではあるが、その中から特に「神の宿る聖地としての山」に選ばれるにはそれ相応の理由が無ければならない。龍神山は、その姿形、景観、自然環境、雰囲気、湧き水などの条件と国府近郊にある唯一の山として、遠く神話時代に遡る伝承を持ち千数百年の間、周辺住民に「神の山」として崇められてきた。

福島・栃木県境から南下した八溝山系が常陸台地に張り出して筑波山に達しその東の端にあたるのが標高約210mの龍神山である。誰も知らない太古の時代、海底に堆積した泥や砂が長い年月をかけて岩石に変化し、それが地殻変動によって地上に現れ、古代には波着岩に証明されるように中腹までが古東京湾の海岸線を形成していた。やがて地盤隆起によって東京湾が

退潮すると山麓には縄文人が住むようになった。――これが一般に言われている龍神山の学歴？であり、宮平遺跡が発見されて風土記の丘が設置されているが、常陸風土記には龍神山麓の事など書かれていない。風土記の丘を造るなら高浜近辺であろうと主張する市民の声を聞く。

龍神山の本来は「清冽な水」に由来し「神様に捧げる酒」に関わる聖地なのであつて、その象徴として「蛇又は龍」が祀られた場所である。そこから更に豊作を祈願する雨乞いの山として近隣の人々から崇拜されるようになったもので勿論、砂利採取のために存在したのではない。歴史的には稲作が東国に普及した弥生文化の時代、つまりは朝鮮半島から渡来した大和朝廷による征服によってクローズアップされたと推定される。

山麓に宮平遺跡があつたという縄文時代以前の龍神山は未だ名前も無く、人々の生活に必要な水が湧き出て、海の幸、山の幸が豊富にある場所だつた。ただし、人が住めたのは山麓の限られた部分で、多くは断崖絶壁であつたらう。

縄文人から弥生人へ、どのように人種の交代が行われたのか。色々な説があると思うが、ある程度の争いがあったり交流が行われたり、例えば縄文人は大地を開墾して耕地にする技術を持ち、渡来系の人々は稲作技術を持ち両者が合して弥生文化が東日本にも浸透していった。ただ、地球の気温低下により縄文時代の主食だった粟、団栗、榿の実などが減少した時期があつたように、海岸線の大幅な退潮と共に縄文人の一時的

な衰亡も予測されるから、石岡近辺に弥生文化の遺跡が少ないことなどからして、龍神山麓にも永続的に人が住んでいたと決め付けられないほうが良いように思われてならない。

つまり、龍神山を評価する際に山麓遺跡の存在を重視する余り山自体の価値やら山に祀られた神様の存在、その蔭にある伝説や歴史の重みを忘れていなかったらうか。極言すれば「選ばれた神の山」である以上は山麓に縄文人が住もうと弥生人が住もうと重要ではない。樹木が鬱蒼と茂った無人の山で周囲が屹立した断崖絶壁で、綺麗な水が山頂から中腹から山麓から滾々と湧き出ていたからこそ聖地になった可能性が高いのである。それを無視した、「宮平遺跡」さえ残ればよい」という単純な発想が砂利採取の山にしてしまった。

或いは、これが風土記の丘発想の原点なのかも知れないが、龍神山には常陸国風土記に残された「晡時臥（くれふし）山」の伝説がある。麓の村に住む努賀毘古（のがひこ）、努賀毘咩（のがひめ）という兄妹があり、努賀毘咩のもとに怪しげな若者が夜な夜な通って求婚し、努賀毘咩は一夜にして懐妊し小さな蛇を生んだ。小蛇は昼の間、黙して語らず、夜には人の言葉で母親と会話した。これは神の子であろうと考えて大きな杯に入れたが一夜で育ち、甕に入れ替えても成長が止らない。困った努賀毘咩は「人の子を育てること叶わず、父なる神の許に行かれよ」と我が子である蛇に告げた。

蛇は嘆き悲しみつつ言った。「謹んで母の言葉

には従うべし。されども異界へ赴くに単独にては心許なし願わくば供の者を添え遣わされんことを乞う」と。

「そなたも知る如く、我が家にあるは我と伯父のみ、汝に従えるべき人無し」

母親の諭しに子の蛇は黙して語らず、その眼は恨みを含んでいたが、やがて別れの時が来ると、忽ち怒り狂い、伯父である努賀毘古を尾の先で振るい殺した（又は噛み殺した）まま天に昇ろうとした。仰天した努賀毘咩は咄嗟に傍らにあつた盆瓮（ほとぎー酒などを注ぐ土器）を蛇に投げつけたところ、蛇は神通力を失って天に昇ることが出来ず、晡時臥の山に留まった。

晡時臥山伝説に主人公？の蛇が登場する上、杯や甕や盆瓮など、酒に関わる土器が重要な小道具として使われることから、この話は奈良県北西部、日本最古の道「山の辺の古道」周辺にあり日本最古の古墳と目される「箸墓古墳」に伝わる大物主神（おおものぬしのかみ）伝説や、神武天皇の妃・比売多多良伊須氣余理比売（ひめたたらいすけよりひめ）の出生にまつわる蛇神伝説を継承するもので、大和朝廷の東征によつて齎されたものと考えられている。そしてここに登場する大物主神というのは因幡の白兔（いなばのしろうさぎ）で知られた大国主命（おおくにぬしのみこと）の霊であるとされていて、その社は大神神社（おおみわじんじゃ）と称し終戦までは官幣大社に指定されていた。これは日本最古の神社だと言われている。

大神神社には「三輪杉」と呼ばれた御神木が

あり、四月の例祭には巫女が杉の枝を持って神楽舞を奉納する。その時に歌われるのが「この神酒は吾が酒（みき）ならず、大和なす大物主のかみし神酒、いくひさ、いくひさ」という酒寿（さかほがい）の歌である。その由緒を尋ねれば、初代の天皇（俗説では第十代の天皇）に擬されている崇神大王の時代に疫病が流行した際、酒造の租・高橋邑人活日（たかはしのむらびといくひ）なる人物が三輪山で酒を醸造して神酒として大王に献上したことに始まる。現在でも新酒が出来ると酒造りの店に杉玉が飾られるのは酒造の総本山・三輪山の御神木（三輪杉）にあやかっの行事であろう。三輪山には今でも神のお使い（白い蛇）が棲息しているという。

さらに三輪山伝説では神を祀るための酒器（土器）が登場し、三輪山の神が崇神天皇の（国民の）危難を救うのだが、この土器は縄文時代の単純な土師器（はじき）ではなく、大阪地方・陶（すえ）の村で焼かれた須恵器、つまり現代の陶器に通じる高温で焼かれた土器なのである。三輪山に祭神として靈魂が祀られる大国主命は、大和朝廷より前に日本各地に進出していた出雲系部族の代表者である。出雲族は大和朝廷と同様に朝鮮半島から渡来してきた大陸系人種であるが、推定するところ稲作、酒造、養蚕、土器、製鉄、土木などに優れた技術集団であった。九州で勢力を拡大させた大和朝廷が女王・卑弥呼の統率する邪馬台国などを滅ぼして中国・近畿地方に進出してきた頃には、既に西日本各地に展開しており、先住民族の縄文人とも

友好関係を保っていたと推定される。須恵器を伝えたのも出雲族であつたらう。

軍事力には優れているが産業技術が幼稚な大和朝廷と、当然、新兵器も備えた技術集団・出雲族とが戦つてどちらが勝つかは分らないが、両勢力とも損得を計算して妥協の道を選んだものと推定される。その仲介役として重要な働きをしたのが茨城県を代表する神様・鹿島神宮の建甕槌命（たけみかづちのみこと）だったことを神話が物語る。親分の大国主命から全権を委任された建甕槌命は大和朝廷の軍事顧問兼産業アドバイザーとして国造りに協力した。

稲作を普及させるために不可欠な水田開発で最も障害となるのが「蝮の害」である。さらに神に供える酒造りに適した水の綺麗な場所にも蝮がいる。日本列島を豊かな国土に変えるための最大の敵は蛇だった。見つけ次第に退治していたが、とても征伐しきれものではない。そこで蛇を「聖なる動物」として神に祀ることを思いついたのである。その発祥地が大和朝廷進出の地であり、出雲族と大和族とが統合されて最初の王朝が樹立された三輪山であつた。

実は、その三輪山から伝えられた晡時臥山の蛇神伝説と言うよりも晡時臥山自体が石岡の龍神山のほかにもう一か所在つて、どちらが本家なのか学者の先生方の意見が分かれているらしい。これも龍神山にとつて不幸なことである。石岡以外の場所というのは、水戸市と笠間市と城里町との境界にある標高201mの「朝房山」で、現在でも無事に存在し涸沼川や藤井ダムの

水源を成し、近くには龍・蛇を祭神とする神社や龍潭淵・谷津（蛇の神・やと）などの地名が存在している。さらに水戸市は一帯を森林公園に指定し保護している。これだけでも、どちらが本家を競う場合に石岡は不利になるのに晡時臥山伝説の根拠となる常陸風土記では、晡時臥山を那賀郡の項に記載してある。朝房山から水戸市、那珂市、ひたちなか市、大洗町、そして常陸大宮市、城里町など那珂川上流沿岸の地域は古代の那珂（那賀）郡に属していた。

これに対して龍神山が晡時臥山だとする根拠は「晡時臥山が茨城の里」の項目に記載されていること、及び努努毘咩が昇天する蛇に投げ付けた盆瓮（酒器）が落ちた片岡の村が龍神山の近くにあることの二点である。何よりも「茨城の里」が那賀郡にある訳がなく、これは後代に編集し直した際、茨城郡に入れるべき「茨城の里」を誤つて「那賀郡」に入れてしまったというのである。

両説ご尤もなれど、本家・本元を争う場合に真つ先に掲げるべきものは看板であり、晡時臥山伝説の看板に相当するのは山自体である。石岡市はその看板をさっさと放り出したようなものだし、さらに悲しいことに「茨城の里」が実は古代の那賀郡にも存在したとする説がある。これでは幾ら優秀な弁護士が付いても裁判では勝てる見込みがない。龍神山の名誉はどうなるのか：

最初に述べたように、ここからは「龍神山の大切さ」を強調するためにイギリスの「地球は

平面だと信じる会」に倣つて怪しい説を展開していくが、歴史とは過去であり、これが真実だ！とは誰も言えない筈である。

さて、大和三輪山に興り蛇と酒と神様とに纏わる伝説を持った大和朝廷の勢力は東へ東へと征服の軍を進めて関東地方へも進出した。その頃、現在の東海道つまり太平洋沿岸の道は無く、命令を受けた武将たちは現在の中仙道に添うコースで栃木県側から茨城県に入つてきたと推定される。先ず最初に来たのは崇神大王の皇子である豊城入彦命（とよきいりひこのみこと）であり率いる軍勢には出雲族の兵士も多かった。一行は平野部を進んで筑波山に突き当たり、初めは山を避けて足尾山方面に進んだのだが、恐らく現在の岩瀬辺りから山越えに成功して旧八郷地区に入った。西の国から来た一行は太陽の昇る東の方向に執着していたから、恋瀬川沿いのコースで一旦は南下して柿岡までやってきた。そこから東寄りに進路を取るつもりだったが一行の前には海のような広大な沼地が広がつて行く手を塞いでいたのである。そして沼の先端に高くはないが全山緑に覆われ、切り立つ断崖に囲まれた不思議な山を発見した。沼は二つあり、山の西は北の山地から延々と続く大沼、そして東には山の姿を映す鏡のような広大な池が展開していた。現在、しよぼくれた姿で残る柏原池である。

豊城入彦命の一行は大沼の淵を回るように波着岩の上を通過して龍神山麓まで来たものと想像できる。さらに東進するためには、柏原の大

池と現在よりも川幅の広い山王川とを越えなければならぬ。船を造るにしても時間がかかる。それよりも豊城入彦命は、二つの沼に挟まれた山に不思議な霊力を感じていた。

「この山には、父親の崇神大王が信仰した大和三輪山の雰囲気がある」……と。

豊城入彦命は、この山に三輪の大神を祀り「三輪神の山（みわかみのやま）」

と名付けた。未だ人も住まず名前さえ無かった八溝山系の端にある小さな山はかくして「みわかみやま」と呼ばれるようになった。

東へ行くことが叶わなかった豊城入彦命は、一旦、そこから引き返して、先ず豊かな山麓の柿岡一帯を開発したと推測される。その頃の石岡市街に相当する地域は、海岸線が後退した地形その俣に無数に入り込んだ複雑な谷津が蝮の巣となっており、さらには所々に岩石が露出する近寄り難い荒れた台地だったのでなからうか。

建甕槌命の協力で奈良盆地に王朝を築いた崇神大王は、西暦三五〇年頃に王位に就き、その治世は三十年には達しなかった。死後に葬られた古墳について宮内庁は奈良県天理市にある行燈山古墳が崇神天皇陵だと言っているようだが、それは戦前の神話を鵜呑みにした説であり、三輪山伝説に結び付く蛇神伝説を持つ箸墓古墳こそ初代天皇（大王）の墓だと考える学者が多い。

崇神大王の長男に生まれながら母親の身分の關係で王位に就くことが出来なかった豊城入彦命は、東国に遠征し筑波山周辺の開発に従事し

ていた。その中心となった出雲系の人たちは、やがてそこに新治国を興した。遅れて開発された石岡は後に「茨城国（郷）」に属するが、豊城入彦命らが見出した龍神山近辺までは新治国に属していたと思われる。そして豊城入彦命は遠く関東へ出張中に親会社が倒産したような立場に立たされて都へ帰れず、その子孫が茨城・栃木辺りに残ったようである。二荒山神社の祭神は豊城入彦命である。

石岡近辺でも初期に開発された龍神山の周辺には徐々に集落も形成されるようになった。山の神に供える酒造りに適した水も豊富にあり、人々の飲料水となった。豊城入彦命が山麓に建てた小さな祠は「みわかみ神社」と称され、集落の名も「みわかみ」と呼ばれていた。しかし「みわかみ」の発音が言い難いため、いつしか「みわかみ」が「むらかみ」に変わり神社も集落も「村上」と表記されるようになってしまったのである。そして時代が過ぎていった。

中央では新たに九州の筑紫から興った百済系要素の一段と強い「応神天皇」の王朝が政権を握り、武内氏や丸邇（わに）氏などの有力部族が政権に関与するようになった。常陸国へも、新たな政権に忠誠を誓った出雲系や物部系の武将たちが次々と派遣され、一段と開発が進められた。彼等も豊城入彦命たちが進んできたように筑波山麓の西側を北上したのだが、山越えはせず水戸方面に至り那珂川沿岸に到達した。そこで那珂川を遡る勢力と、現在の水戸近辺に拠点を構える勢力と、更に北上する勢力とに別れ

た。

水戸近郊に拠点を構えたのは天津彦根命（あまつひこねのみこと）と多祁許呂命（たけころのみこと）という二人の武将らしい。二人の關係は明らかではないが父と子とも考えられる。大和朝廷と深い関わりがあるが本来は出雲系の人物である。水戸近辺に拠点を置いたのは未開発だった茨城中央部と鹿島・行方地方を開発してゆくためである。事務所として選ばれた場所には、現在の県立中央病院の北方数キロの地点にある水利の良い台地で、周囲に茨の棘を持つ植物が群生していたため「うばら（大茨）の里」と称した。

うばらの里から、さらに北の方向を望むと、出雲族が協力して初代の王朝を成立させた三輪山に似た山がある。天津彦根命なのか多祁許呂命かは分らないが出雲族の武將は、かつて豊城入彦命が初期の龍神山に三輪大神を祀ったように北方に見える形の良い山に三輪大神を祀った。その山もまた綺麗な水が湧き出ており、稲作作業に妨げとなる蝮の生息地だった。日暮れになるとその山は恰も人が臥せているように見える。誰言うとなく「晡時臥山（くれふしのやま）」と呼ばれるようになった。それが朝房山であり、常陸風土記に記載されたように「うばらの里」の北方に見えるのである。

出雲族が進める開発と言う名の征服事業は、多少の抵抗を受けながらも着実に進み涸沼南岸から行方台地に至り、さらに鹿行地域から筑波山を目指して霞ヶ浦沿岸に広がっていった。そ

の頃、那珂川上流域域にいた出雲系部族のうち後に「古事記」を現わす太安萬侶（おおのやすまろ）の祖先に当たるとされるグループが那珂川を下って水戸北西部に移ってきた。嘯時臥山の麓に近い場所である。

太（おお）氏は多、飯富とも書き、新興勢力として大和朝廷に深く関わった。常陸国に進出した太氏は現在の水戸市飯富町辺りに拠点を移したのだが、その地域は開拓者として先住している多祁許呂命らの本拠に近い。部族の勢力関係から初期行政区分の境界に移動があつて、大茨の里は茨城郡から那賀郡に編入されたものと考えられている。多祁許呂命たちが苦勞して開発した茨城県中部、南部、鹿行地方は新興勢力の太氏に譲られ、先遣隊として常陸国に入つた出雲系の人たちは、県北や岩城方面に移らざるを得なかつたと想定されている。

太氏の中心人物は水戸市の愛宕山古墳（県内三位の規模）に埋葬されている建借間命（たけかしまのみこと）で、この人が鹿島神宮の祭神・建甕槌命のモデルではないか？と私は思っている。それはともかく、天津彦根命や多祁許呂命らの先駆者（豊城入彦命に次ぐ常陸国開発の功労者）は、鳶に油揚げを攫われた形になり、功績を太氏に持って行かれたことになる。本来ならここで反乱が起きるところだが、利口者の建借間命は多祁許呂命を自分の幕僚として残し、かつ出雲系開拓者の元祖・天津彦根命を神として開拓地に祀ることを許した。その神社は「：ひこねのみこと」から「ひこね神社」と命名さ

れ「飛護念神社」と書かれた。旧・美野里町のどこかに建立されたのだが、いつしか所在不明となり、近年に至って、ようやく石船神社がそうであろうと言われているらしい。

一方、多祁許呂命は少数の部下と共に一族の集団を離れて建借間命の軍勢に加わり県南地域の征服開拓に関わった。その勢力は行方地方を制圧して霞ヶ浦が恋瀬川に合する高浜に至り、かつて豊城入彦命が進攻を断念して引き返した石岡の台地に達した。風光明媚な高浜は観光地として急速に開発されると共に、海上輸送の拠点としても重視され、それに伴って高浜を望む台地が徐々に開発されていった。此の地にも茨が生い茂っていたので、多祁許呂命らは「大茨」に因んで「茨木」と名付けたのである。後に一帯は「茨城郡」となつて郡衙が置かれ、要衝として常陸国の成立により常陸国衙が新設されることになる。

石岡の台地が人の住む場所が変わつて、周辺を見渡すことが出来るようになったとき、人々の眼には筑波山の秀麗な姿とともに柏原池に映える神秘的な山の姿が映つた。かつて豊城入彦命が三輪神の山と名付けた龍神山である。特に多祁許呂命に従つて太一族の軍勢に組み入れられていた兵士らには那賀郡内に三輪大神を祀つた朝房山を思い出させる山であつた。その山は、さらに夕暮れになると朝房山と同じく人が臥した形に見えるのである。こうして村上山もまた嘯時臥山（くれふしのやま）と呼ばれるようになり、豊城入彦命が伝えた蛇神伝説と一体化し

て今日に至っている。

やがて湧き水の豊富な龍神山の蛇神伝説は、雨乞いの神としての龍神（雷）信仰に変わつてゆく。そこには三輪山を取り巻く吉野山系の水神信仰（吉野の豪族である葛城氏の勢力増大）が窺われ、祭神には丹生川上の高麗（たかおかみ）と吉野下市の闇籠（くらおかみ）とが充てられ山の名称も龍神山となる。

龍神山麓には養老溪谷の「子は清水」伝説が残る。これは、古代に蛇神に酒を供えた儀式の名残であり、清らかな水が絶え間なく湧き出でる場所にしか伝説は伝わらない。その酒の製法は三輪の大神神社に伝わる「酒を醸す（さけをかもす）」方法で行われたに違いない。その伝統が近代になつて石岡を茨城県最大の醸造の町にしたのである。酒は本来、神のみがキコシメスものであり、人間の飲み物ではない。それを飲んだ人間が問題を起こすなど言語道断！。

村上天社こと、かつて豊城入彦命が龍神山麓に祀つた三輪神神社は、その後の盛衰を経て仁明天皇の承和四年（837）には官社に列し、光孝天皇の仁和元年（855）従五位上の官位に列せられた。今は佐志能神社と名前が変わり村上地区と染屋地区に、それぞれ祀られているが、それは室町時代以後、戦乱によって権力構造が大きく変わったことによる。茨城の里や嘯時臥山が何か所在ろうと一向に構わないではないか。：水戸の朝房山も石岡の龍神山も、そこに神々の存在を意識し幾重にも重なる貴重な歴史を不滅のものとして、どう後世に伝えていく

かが問題なのだ、棲家の無い白蛇に代わって
言わして貰う。

北島三郎はヒット曲「北の大地」を朗々と歌
う。

はるかなる

北の空

木霊（こだま）も叫ぶ エゾ松林

母の大地に根を下ろし

雪を吸い みぞれを背負い

この人生を アア：ア： 噛みしめる

石岡市民が「北の大地」を歌う場合は、次の
ように変えて歌わなければならないようである。

あおぎみる

西の空

木霊が叫ぶ お山が見えぬ （注：ここか

らは涙声で歌うこと）

母の大地が崩される

雪を吸い みぞれを背負う

この清流も アア：ア： 絶ち切れる

龍神山は単なる縄文遺跡の所在地だけでは
なかったのです。惜しい山を亡くしました。

（合掌）

お蚕さま（おじやま）

鈴木真紀子

私の生まれた岩手では話す相手の身分・地
位・立場・年齢・親疎などによって最低5通り
以上ことばの使い分けをします。

たとえば「寝ろ」という命令文なら、下から
順に

1. 寝ろお

2. 寝でえ

3. 寝どがんせえ

4. 寝でおだんせえ

5. 寝でくたんせえ

6. 寝でくたんせえ

その他に「おやすみあんせ」「おやすみあつてく
たんせんせえ」もあります。

「あんせ」は「なさいませ」が、「くたさん
せ」は「下さいませ」が転じたものです。そし
て普通の会話に「ございます」の変化した「ご
さんす」が使われます。

子供たちは、親や祖父母の会話を通して耳か
ら学び 自然に使えるようになりますし礼を失
した使い方をすると注意されます。

京から遠く離れた偏狭の地で、なぜこんなに
多くの敬語の序列が必要だったのか・・・もつ
と深く調べてみたいと思っています。

十歳で生家を離れてからは、札幌・東京・茅
ヶ崎と比較的標準語地域での生活が長くあり
八年前から石岡に住みました。

石岡に知り合いもなく決まった仕事もない

私は、土地の方たちと深く接することはありま
せんでした。趣味のグループの方たちはなぜか
茨城県外からの方が多く、純粋な茨城弁を話さ
ない方たちばかりでした。

ところが数年前から、短期の仕事ですが憧れ
の遺跡発掘の仕事に従事することができました。
そしてそこで働く人は、嬉しいことに「美しい
茨城弁」で話される方がほとんどです。

その土地のことばは、意思疎通のための便宜
上の標準語と違って、よそ者にはわからない微
妙なニュアンスの妙があつてとても興味深いで
す。また土地っ子でなければ感じ得ないおおら
かなユーモアもあります。

母国語である日本語が体の深部まで沁み込
んでいるように久しぶりに「身土不二」という
ことばを思いました。

そして、ある本に「茨城弁には敬語がない」
と書かれてありましたから、そのことに注意し
ながら周りで話される会話を聞いていましたら
敬語発見！です。

嬉しいことが耳に入りました。

「おごさま」です。「お子様」ではなく「お蚕さ
ま」だそうです。

あくこれこそがこの土地の歴史と文化の接
点の一つだ！ と感激しました。石岡は最近ま
で「蚕」が大事な大きな存在だったのだと。す
とんと腑に落ちました。

遺跡の発掘とおなじように、たったひとつの
言葉から「民の生活」が私の前に立ち上がって
きた瞬間でした。

流れ星(2)

小林幸枝

昨年末のことでした。

初めて流れ星をみて、とっさに運を願ったのですが、年が明けて半月しか過ぎていないのに、突然の体調ダウン。

扁桃腺が腫れ、お茶も飲めないほどの痛み。そして、高熱が続き一週間も寝込んでしまった。高熱に浮かされ、自分の身体でも頭でもなく、ボーツとしている中で思ったのは、

「やっぱり私って運が悪いな」
だった。

去年は、運の悪さを思い知らされるようなことが連続してやって来て、深刻に塞ぎこみ、自分の悲劇をうらむような一年だった。

私って運が悪いって言ったら、運は自分で作るものだよとわれ、そうかなと思っっているときに、初めて流れ星を見て運を願ったのですが、運は来なかった。やっぱり私って運が悪いんだな、と思い始めたとき、流れ星に運を願ったけれど、運を創るために未だ何もしていないことに気づいた。

それで、熱が引いてきたことを幸いに、辞書を引く張り出して、「運」の意味を調べてみたら、ぐるぐるめぐり歩くこと、はこぶこと、と出ていた。それで納得できた。私は、自分が幸せになるために、幸せを探してめぐり歩くことをしていなかった。そして、幸せの種を見つけて家に運んでくることもしていなかった。探しめぐり、はこんで来るから「運」なのに、何もしな

いで待っていただけなのでした。

折角、初めて流れ星をみて運を願ったのだから、運を探して、はこんでくる努力をしなければいけないんだと分かったのです。

よし！ 運を創るぞ。現実を嘆いて、恨み事を言っただけでも、運はやってこない。その心に決めたら熱も下がってきたような気がするから不思議だ。気分も楽になってきた。

二月十八日は、ことば座の旗揚、旅立ち公演です。私がプロの俳優として第一歩を踏み出す日。拍手は待っていてもしてくれません。拍手のもらえる舞を見せなければなりません。拍手は私の幸運。運は自分が創るもの。確りそう思えたら、また流れ星が見たくなった。

子犬のリールちゃんとアールちゃんを抱いて外に出たら、雲が被っかけていて星空はなかった。でも雲の向こうには果てしない無限の宇宙があり、そこにはプラチナの線を引いて流れる星が無数にあるのだ。

私は、見えない流れ星に精一杯に声をした。「ありがとう。願いの運が半分叶いました。残りの半分の運は私が創ります」

特集『一行文』

心象の発見を言葉に落とす

白井啓治

毎月第一、第三金曜日に、カフェ・キーボアの二階で兼平さんと二人で「絵と一行文」の教室

を開いているが、とても楽しい教室である。

兼平さんが絵を、私が一行文を担当しているのであるが、絵も文も形式にこだわらず自由自在に自分の楽しさを紙に落とすという考えで、先ず自分を楽しみ、褒めて、そして気持ちに余裕があったら教室の友を褒めるというスタイルでやっているが、笑いのたえない教室である。

一行文のそもそものは、仕事で取材に出かけた際の、心象残像を一言にメモすることから始まったものであった。

母が山口青邨に師事し俳句をやっていたことから、高校の頃からランボーに傾倒するかわら真似事に五七五を並べてはみたのだったが、生来のはみ出しの性格の所為か、季語だの字あまり字足らずなどを言われるのが気に入らず止めてしまった。

演劇にのめり込んで大学を辞めてしまった頃であった。大学は辞めたものの、新劇という手前勝手な枠を作り上げた世界での不毛な論戦に嫌気が差し始めたとき、神田の古本屋で偶然、種田山頭火の草木塔に出会い、形に囚われず一切の無駄を省いて心象をただ言葉に落とす句に、芭蕉を越えた俳句だと感動したのだ。

その後、演劇を捨て映画の世界にはいり、脚本家として独立したとき、取材に出かけた際の心象の残像メモとして山頭火を真似て書き始めたものが、いまだに続いている。

全くの形式にこだわらないで、心象を一言の呟きとして言葉に書く、言葉に落とすという言葉詩を一行文と名づけ、日常の中に直ぐに忘れ、

捨ててしまう心象を拾い上げて言葉に吹き、文字に落として日記代わりにしている。心象を言葉に落としていたときは、ただの習慣であるが、日の過ぎて読み返してみると、何故か楽しい気持ちにさせてくれる。それで、日々の移ろいの中にある心象を拾い上げて言葉に落としてみると楽しいよ、と皆さんにお褒めしているのである。

一行文というのは、無駄を省いた心象表現文、という意味だから、無駄な説明を省いた自分にとって一番短い表現文であれば、三行でも四行でも一行文と呼んでいる。

もう何時頃からだったか忘れてしまったが、弟子の若者達に、表現の無駄をそぎ落とす習作として一行文を書くことを強制し、私もいまだに続けているが、仕事の文章から離れて、気儘にノートに言葉を落として楽しむのには、肩の張らない文作である。

最初は、短歌や俳句の感覚が抜けず堅苦しく言葉を捜してしまうが、少し慣れてくると自分の流れ、リズムで心象を言葉に落として楽しむことができるようになってくる。そして、さらにもう少し欲張って、言葉に落とした心象の色を見つけて、言葉に沿って一刷きしてみるとちよつと豊かな気持ちになってくるから不思議である。

文を書く、俳句を、短歌を詠むと考えると億劫な気持ちになるが、日々の心象を言葉に吹き、文としてノートやスケッチブックに落とし、その脇にちよつと色を染めてみる、と考えると気

楽に楽しむことが出来るのではないかと思う。ためしに始めてみてはどうでしょうか。

『にこの年の睦月に吹いて…』 兼平ちえこ

初光に迎えられて亥の年

トトロの森だね

小吉 結ぶ 孫の手 (常陸国一の宮にて)

青苔のきざはし

張り出す木の根

ゆらす鈴

金砂の杜

拓かれた古道 薬師さま誇らしげ

(菖蒲沢にて)

金柑の華 伊豆長岡の街

このとしの七福

まとめて 伊豆長岡源氏山

とまっているよ 小枝に春が

眺く女人(もかくひと)の花 咲いた

(二年ぶりのカトレア)

初筑波 靴音一人

のぞいてる
ピンクの命
葉陰のお宿

裸木 ビルに姿うつして

朝日 元氣

(井の頭線にて)

“忘れてるのは誰”

こうもり傘 提げて

公園の 雨あがり童子 (石岡運動公園にて)

お似合いよ けや木さん

横縞 花白緑

ママ イルヨ

パパ オシゴト ガンバツテル

受話器叫ぶ 午後八時

青空

白い富士

登山靴 拍手

雪 通せんぼ

冬 威張ってる

(甲州高尾山にて)

春 垣根でほほえんでいる

川面で たわむれるのは春

呼んでいるのは どちらさま
春です

福 ふえて また一つ

『日々の中』

あばら家から顔を出すスキの穂

汗ぬぐうとき金木犀のかほり

つい飲むようになった販売機の茶

日暮れていく散歩道

そばの花ふるえて風さやぎいく

あざやかにいのちもやす名残り花

あらためて秋草の緑をみて

秋草の中に白鷺と彼岸花いて

幼子の遊びの中に葉鶏頭

葛が散って菊の咲く山の駅

あるじ思い 柳大きくゆれて

伊東三子

兼平さんはふるさとルネサンス塾の第一期生、
伊藤さんは第二期生ですが、二人の書いた、日々
の心象残像を一行の言葉に落とした文を読むと、
その人の暮らしの心が伝わってきます。
暮らしぶりの内容は分らないけれど、暮ら
しを紡ぐ機音が聞こえるようで、ああ、これが
ふるさとの文化なんだと感じさせてくれます。
そして明日の希望が思えて、嬉しくなっていま
す。

絵と一行文教室から

・ 秋に深呼吸

・ 金木犀 鼻で知りました

・ ちよつと隠れた朝日を待っている時間

・ 鉢からこぼれるぐらいい咲くピオラ
お願い事がふえそうです

・ 鉢からこぼれるぐらいい咲くピオラ
今日はしんと小さくなっています

・ 遠くに連れて行かれそうな月
(まさこ)

・ シクラメン肩寄り添って拍手する

・ やわらかい風が吹いてコート忘れる

・ 電線の小鳥 間隔同じにしてとまっている

・ 道端に水仙花が出迎えている

・ 蠟梅の花落ちて春の道が一直線
(やすこ)

・ 朝起きて窓を開けたら

・ 霜柱大きく背伸びしていた

・ 丸大根 口の中でトロツととろけて
甘い母の味

・ 丸大根 口の中でトロツととろけて

・ 丸大根 口の中でトロツととろけて

・ 丸大根 口の中でトロツととろけて

・ 湯上りの父の寝ている背中を見ていると
感謝の気持ちでいっぱいになる
・ 赤とんぼ青空に舞う昼下がりに
(さちえ)

・ 初日の出 部屋の窓から願い事

・ 今年こそと気負ってみても体動かず

・ 雨あがり

・ 何処までも青い空

・ ほんかに香る蠟梅に

・ 急ぎの足も自然に止まる

・ ゴウゴウゴウ ガタガタガタ キー

・ いえ工事現場では

・ MRIです
(みちこ)

今までなら直ぐに忘れ、捨ててしまっていた
暮らしの中の小さな発見を、言葉に落として残
してみると、こんなに素晴らしい言葉歌になる
のだなど、改めて感じさせてくれます。
何にもない町、と言う人もいますが、とんで
もありません。たぐさんの暮らしのある町です。
一行に落とした暮らしの発見の言葉を読むと、
嬉しい気持ちになつてきます。

編集事務局

〒315・0001

石岡市石岡13979・2

TEL 0299・24・2063

(白井啓治方)